



# 石内都 きめ 肌理と写真

2017年12月9日(土)~2018年3月4日(日)

2017年12月8日

横浜美術館では、2017年12月9日(土)から2018年3月4日(日)まで、現代日本を代表する写真家・石内都(いしうち・みやこ)(1947年生まれ)の国内8年ぶりとなる大規模個展「石内都 肌理(きめ)と写真」を開催いたします。

石内都は、2014年にアジア人女性として初めてハッセルブラッド国際写真賞を受賞するなど、現在、国際的に最も高く評価される写真家のひとりです。

多摩美術大学で織りを学んだ石内は、1975年より独学で写真を始め、思春期を過ごした街・横須賀や、日本各地の旧赤線跡地の建物などを撮影した粒子の粗いモノクローム写真で一躍注目を集めました。

80年代以降は、目に見えない時間の在処としての身体に関心を寄せ、同い歳の女性の手足を接写した〈1・9・4・7〉や傷跡を写した〈Scars〉など数多くのシリーズを発表。こうした実績が評価され、2005年には下着や口紅など、母親の遺品を撮影した〈Mother's〉でヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家に選ばれました。近年は、広島平和記念資料館に寄贈されたワンピース、制服、眼鏡など、被爆者の遺品を被写体とする〈ひろしま〉や、メキシコの画家フリーダ・カーロの遺品の撮影などに取り組み、その活動は多くの注目を集めています。

2017年は、石内が個展「絶唱、横須賀ストーリー」で写真家としての実質的なデビューを果たしてから40年を迎える年にあたります。本展は、この節目の年に、石内自らが「肌理(きめ)」というキーワードを掲げ、初期から未発表作にいたる約240点を展示構成するものです。

住人のいなくなったアパート、身体の傷跡、日本の近代化を支えた大正・昭和の女性たちが愛用した絹織物、亡き母や被爆者らの遺品の写真をとおして、存在と不在、人間の記憶と時間の痕跡を一貫して表現し続ける石内の世界を紹介します。

横浜の地に暗室を設けて早くも 40 年の歳月が過ぎた。

暗室から生まれた写真はヴィンテージプリントとなり、時間と空気をたっぷり吸って粒子の粒を際立たせる。横須賀からスタートした写真の行方は、固有の気風をのせて歴史と身体と遺されたもの達が一体となり、肌理(きめ)を整え、未来へ向けて発信する。

石内 都

## ■展覧会の構成

### 横浜 Yokohama

1975 年、石内都は横浜の自宅に暗室を構え、写真家としての活動を始めた。以来、デビュー作の〈絶唱、横須賀ストーリー〉から〈Mother's〉に至る石内のモノクローム写真のほぼすべてが、この横浜の暗室で制作された。

「横浜」は石内にとって、重要な被写体でもあり続けてきた。デビュー前に自宅周辺の風景を撮影した〈金沢八景〉では、長時間露光された空や雲、覆い焼きされた地平線など、その後の初期三部作へと繋がる粒子の表現が試みられている。

横浜における〈Apartment〉〈連夜の街〉の制作を終え、80 年代後半に取り組んだ〈yokohama 互楽荘〉〈Bayside Courts〉は、失われた横浜の風景と記憶を刻印する写真となった。本章は、石内が「横浜」の風景や建物を撮影した写真に加え、横浜を拠点に活動した舞踏家、大野一雄の身体を写した〈1906 to the skin〉で構成される。

### 絹 Silk

被爆した女性たちが纏っていた絹の衣服を撮影したことを機に、石内は 2011 年、生まれ故郷の群馬県桐生市に残された絹織物、銘仙を撮影した。銘仙は、ヨーロッパの前衛美術の動向を取り入れた斬新なデザインと鮮やかな色彩が特徴で、日本の近代化を支えた大正・昭和の女性たちが普段着として愛用した着物だ。

2017 年、石内は新たに二つの「絹」と出会った。ひとつは、アメリカのファッション・デザイナー、リック・オウエンスの亡き父が日本で入手した着物。もうひとつは、徳島県に戦前より伝わる阿波人形浄瑠璃の衣裳である。

絹織物の産地として知られる桐生。生糸や絹織物の輸出で発展した横浜。石内は、「絹」をとりまく歴史を紐解き続けている。

## 無垢 Innocence

「人は無垢であり続けたいと願望しながら、有形、無形の傷を負って生きざるをえない。」  
1990 年頃から約 20 年にわたり継続された傷跡のシリーズの制作は、石内にとって生きることの根源的な意味を問い直す作業だった。その中から女性の傷跡だけを集めた〈Innocence〉は、からだに傷跡をもつ女性への共感に満ちた写真である。石内は傷跡を「生の証」として提示する。精緻な階調で表現された写真は、傷跡をもつ女性たちの悲しみや苦しみを慰撫するような静けさを湛えている。

〈不知火の指〉は、小説『苦海浄土』の著者であり詩人でもある石牟礼道子の手足を接写した写真だ。石内がとらえた石牟礼の肌理には、90 年の時が刻まれ、その手ひとつで戦い続けている時間の重さが表れている。

## 遺されたもの Belongings

母の死と向き合うために撮影された〈Mother's〉は、石内が遺品を撮るきっかけとなり、その後の写真の方向性を決定づける作品となった。

〈フリーダ〉は、ヴェネチア・ビエンナーレで〈Mother's〉を見たフリーダ・カーロ博物館の学芸員の依頼を受けて始まった。20 世紀のメキシコを代表する画家フリーダ・カーロは、女性の痛みや悲しみを主題に作品を描いた。2012 年、「青い家」で撮影された作品は、病気や事故で満身創痍となったフリーダの、日常生活の品々で彩られている。

2017 年、〈ひろしま〉は撮影開始から 10 年が経つ。終戦から半世紀以上を過ぎてもなお、被爆者の遺品は毎年、広島平和記念資料館に届けられている。

持ち主の身体が消滅したあとも遺されるものたち。ここでは、事物の表層 = 肌理を通して、時間の堆積として被写体を考察し撮影するあり方の、ひとつの到達点が示される。

## 石内 都 (いしうち みやこ)

1947 年群馬県桐生市生まれ。神奈川県横須賀市で育つ。

1979 年に〈Apartment〉で女性写真家として初めて第 4 回木村伊兵衛写真賞を受賞。2005 年、母親の遺品を撮影した〈Mother's〉で第 51 回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家に選出される。2007 年より現在まで続けられる被爆者の遺品を撮影した〈ひろしま〉も国際的に評価され、近年は国内各地の美術館のほか、アメリカ、オーストラリア、イタリアなど海外で作品を発表している。2013 年紫綬褒章受章。2014 年には「写真界のノーベル賞」と呼ばれるハッセルブラッド国際写真賞を受賞。作品は、横浜美術館をはじめ、東京国立近代美術館、東京都写真美術館など国内主要美術館、ニューヨーク近代美術館、J・ポール・ゲティ美術館、テート・モダンなど世界各地の美術館に収蔵されている。

©Maki Ishii



## ■関連イベント

### 1、対談 桐野夏生(小説家)× 石内都

日時	2017年12月9日(土) 14時~15時30分(13時30分開場)
会場	横浜美術館レクチャーホール
登壇者	桐野夏生(小説家)、石内都(本展出品作家)
定員	220名(事前受付終了)
参加費	無料

### 2、アーティストトーク

日時	2018年1月13日(土) 14時~15時30分(13時30分開場)
会場	横浜美術館レクチャーホール
登壇者	石内都(本展出品作家)
聞き手	逢坂恵理子(横浜美術館 館長)
定員	220名(12月9日[土] 10時より申込受付開始、先着順)
参加費	無料

※終了後、作家による展覧会カタログのサイン会を実施します。

### 3、上映&トーク

石内都の創作を追った映画『ひろしま 石内都・遺されたものたち Things Left Behind』(2012年、80分、リンダ・ホーグランド監督)を上映し、石内とゲストによるポストトークを開催します。

日時	2018年2月18日(日) 13時30分~16時(13時開場)
会場	横浜美術館レクチャーホール
登壇者	リンダ・ホーグランド(映画監督)、榎木野衣(美術批評家)、石内都(本展出品作家)
定員	220名(12月9日[土] 10時より申込受付開始、先着順)
参加費	無料

### 4、学芸員によるギャラリートーク

日時	2018年1月6日(土)、1月19日(金)、2月3日(土)、2月16日(金) いずれも14時~14時30分
会場	本展展示室
参加費	無料(事前申込不要、当日有効の本展観覧券が必要)

### 5、夜の美術館でアートクルーズ

閉館後の美術館で、学芸員の解説を聞きながらゆったりと作品をめぐる、特別な鑑賞会。

日時	2018年2月10日(土) 19時~21時
会場	本展展示室
解説	逢坂恵理子(横浜美術館 館長) 大澤紗蓉子(横浜美術館 学芸員)、日比野民蓉(横浜美術館 学芸員)
参加費	3,000円
定員	30名(12月9日[土] 10時より申込受付開始、先着順)
申込締切	2018年2月2日(金)または定員に達し次第

**■ 展覧会カタログ**

書名	「石内 都 肌理と写真」 (展覧会公式カタログ)
発行日	2017年12月8日
発行元	求龍堂
判型	B5判 上製本 252頁 (図版約500点)
価格	2,916円 (税込)
著	石内都
企画	横浜美術館
監修	逢坂恵理子
寄稿	ジェフリー・アングルス、リック・オウエンス
テキスト	「石内都—限りある時間を超えて」／逢坂恵理子 「歴史のシミ」／ジェフリー・アングルス 「記憶が飛ぶ空へ」／石内都 「親愛なる都へ」／リック・オウエンス 「石内都と横浜—Yokohama Story」／大澤紗蓉子
資料	作品リスト、撮影地図、年譜、主要文献目録／日比野民蓉 編

**■ 基本情報**

展覧会名	石内 都 肌理と写真
会期	2017年12月9日(土)～2018年3月4日(日)
休館日	木曜日 *但し2018年3月1日(木)は開館
開館時間	10:00～18:00 *2018年3月1日(木)は16:00まで、3月3日(土)は20:30まで *入館は閉館の30分前まで
観覧料	一般1,500円、大学・高校生900円、中学生600円、小学生以下無料 65歳以上1,400円(要証明書、美術館券売所でのみ対応)
主催	横浜美術館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)
助成	芸術文化振興基金
制作助成	公益財団法人テルモ生命科学芸術財団
協賛	株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパン、株式会社資生堂
協力	The Third Gallery Aya、みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、 首都高速道路株式会社、チョコレートデザイン株式会社
展覧会企画	逢坂恵理子 (横浜美術館 館長) 沼田英子 (横浜美術館 主席学芸員) 大澤紗蓉子 (横浜美術館 学芸員) 日比野民蓉 (横浜美術館 学芸員)

**プレスリリースお問合せ**

横浜美術館 広報担当 鈴木慶子、藤井聡子、埴内美穂、山崎聖一  
Tel.045-221-0319 Fax.045-221-0317 E-mail: pr-yma@yaf.or.jp